

# 郷土博 通信

No.20

2022 秋



『建築記念 鎌田共済会図書館』絵葉書(解説8頁)

## CONTENTS



■ 『建築記念 鎌田共済会図書館』絵葉書	1	■ 墨絵体験講座	7
■ 展示室の紹介	2~3	■ 『建築記念 鎌田共済会図書館』絵葉書について	8
■ ケンペルの見た“シワクの城”	4~6	■ INFORMATION	8



# 第1展示室

(展示期間:10月~3月)

## 図書館の建設工事資料 ー工事現場に入って写真撮影!!ー

スマートフォンのデジタルカメラ機能が充実して、だれでも簡単にきれいな写真を撮影できるようになった今、フィルムをカメラにセットして写真を撮影していた時代があったことを知らない若い世代が増えています。さらに、フィルムを使用する以前は、ガラス乾板〔無色透明のガラスに写真用の感光物質を塗ったもの〕(図1)を用いて写真撮影したことなど、遠い昔の話になりました。

1921(大正10)年9月から翌年9月までの期間、鎌田共済会図書館(地上3階建、鉄筋コンクリート造)建設工事の様子が、ガラス乾板を用いたカメラで撮影されました。図書館建設予定地の地盤がどれだけの建物の荷重に耐えられるのかを調べる地耐力試験を行い(図2)、トロッコを利用して現場に砂や石材を運び、レンガを積み、鉄筋工事後に生コンクリートを流し込んで床面や柱を造り(図3)、3階建の骨組みがほぼ完成した様子(図4)など約40枚の写真が残されています。

ガラス乾板は、1枚ずつ、写真のタイトルと撮影年月日が記された保護紙に包まれています。撮影した時間、天気、シャッタースピードと絞りの数値まで記されているものもありますが、撮影担当者名の記載はありません。

写真のほかに建設工事に関する記録としては、工事期間中の『図書館日誌』が残されています。施工業者の竹中工務店や、香川県土木課の建築技師たちが工事現場を視察したことなどが記され、写真と日誌の記述が一致するものも見られます。また、工事の進捗状況は鎌田共済会会頭の鎌田勝太郎にその都度報告されていたこともわかります。

三脚とカメラと重いガラス乾板を持って、工事関係者が行き来する工事現場の中に入って、建設作業の邪魔にならないように写真撮影を行うことは容易なことではありません。地元の写真館のプロカメラマンに撮影を委託したのであれば先にふれた『図書館日誌』に「写真撮影のため、〇〇氏来場」とでも記入しそうですが、そうした記載は見当たりません。外部に撮影依頼をしていないのであれば共済会の職員が撮影したのでしょうか。いずれにしても貴重な写真資料を残してくれたことは特筆すべきことと言えるでしょう。今回は、図書館の建物の各種設計図なども併せて展示します。100年前の貴重な資料を見て楽しんでいただきたいと思います。

(齊藤 祐司)



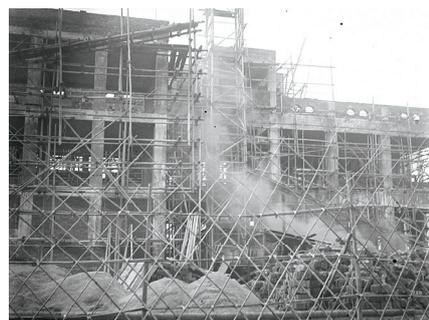
▲図1 ガラス乾板



▲図2 地耐力試験 1921/9/9 17:00



▲図3 コンクリートミキサー 1921/11/23



▲図4 躯体工事完成 1922/2/20

## 第3展示室

(展示期間:10月~3月)

### 鎌田図書館・郷土博物館 100年のあゆみ

鎌田共済会郷土博物館の建物は1922(大正11)年に図書館として建てられ、今年で築100年を迎えました。これを記念し、当館に残された様々な資料から、この建物で展開された活動を振り返ります。

1918(大正7)年、慈善・育英・各種社会教育を目的とする財団法人鎌田共済会が設立されました。社会教育事業として初めに作られたのが図書館です。蔵書数は香川県教育会図書館(後の香川県立図書館)に次ぐ規模で、閲覧室のほか、講堂や倶楽部室などが備えられていました。

当時は閲覧料を徴収する図書館が多い中、鎌田図書館は無料でした。閲覧希望者はカード(図1)、もしくは冊子の目録で読みたい図書の請求番号等を調べ、閲覧票(図2)に記入し係員に渡すと、書庫から目的の図書を取り出してきてくれるという仕組みでした。当館に残されているカードや冊子の目録は、汚れていたり破れていたりしており、いかに多くの人々がカードやページを繰り、目当ての図書を選び出していたのかが想像できます。

図書館では閲覧事業のほかにも、展覧会や講演会、研究会等の社会教育活動も行われていました。当時の展覧会目録(図3)からは、県内各地から資料を借用し、考古資料・古文書・古地図など幅広く充実した展示をしていたことが分かります。

このように、活動が多岐にわたり活発になればなるほど、やがて図書館建物内だけでは対応しきれなくなり、周辺に郷土博物館などが建てられました。そして各施設と連携し、図書利用とそれぞれの活動を結びつけた地域の人々の学びの場として発展していったのです。

しかし、戦後はさまざまな理由で図書館として十分な活動を続けることが困難となり、1951(昭和26)年から1979(昭和54)年までは坂出市に貸与して市立図書館として活用されました(図4)。

坂出市から建物が返還された後は、大幅に規模を縮小し2階で図書館事業を再開しました。1階は瀬戸大橋建設予定地で実施されていた埋蔵文化財発掘調査の事務所などに貸し出された期間もあります。

その後、JR坂出駅高架工事のため、1991(平成3)年に図書館の南側にあった郷土博物館建物は取り壊されることとなり、博物館機能は図書館建物へと移転しました。翌1992(平成4)年、郷土博物館としての活動がここで始まり現在に至ります。

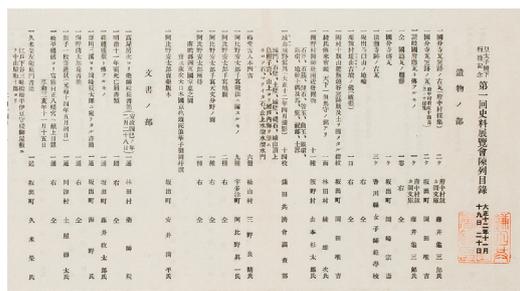
(宮武 尚美)



▲図1 カード式目録



▲図2 閲覧票



▲図3 展覧会目録(部分)



▲図4 1968(昭和43)年の閲覧室(坂出市提供)

## ケンペルの見た“シワクの城”

### はじめに

前号・前々号の本欄ではシーボルトが見た与島の“シワクの村”とそこに所在した船の修繕所を取り上げました。その中で、翻訳者の呉秀三はケンペルの紀行文に“シワクの城”という記述があり、これも塩飽であり、下津井に面した櫃石島に城があったのだろうかと質問しています(前々号7ページ)。

今回はこの“シワクの城”を取り上げます。この城もどうも与島にあった船の修繕所のことにように思えるのです。

### 1 城の記述

ケンペルの紀行文(『江戸参府旅行日記』)の該当箇所を、最初に掲げます。

われわれは夜明けと共に錨を上げ、たくさんの島が浮かぶ広い海を過ぎ、船を七里進めて下津井という小さい町に着いた。(中略)下津井の町には四〇〇～五〇〇の人家があり、三つの地区に分かれていて、各地区は一人の与力が支配している。向かって右手には石造りの塩飽の城があり、その傍らに小さな村がある。ここから遠くない航路の真ん前に、再び槌山という人目をひくピラミッド形の島[大槌島]が見えた。

(文献①より引用)

### 2 ケンペルと江戸参府

エンゲルベルト・ケンペルはドイツ人医師であり旅行家です。オランダ東インド会社艦隊の軍医となり、1690(元禄3)年長崎に着き、商館医として1691・92年の2度、江戸参府に随行します。5代将軍徳川綱吉の時代です。

在日中日本研究に励み、離日後その成果を大著『日本誌』としてまとめ、死後英訳本で出版されました。その第5巻が『江戸参府旅行日記』となります。

さて、上記の箇所は、1691(元禄4)年2月22日の記述です。

ケンペル一行は東(江戸方面)に向かって進んでいるため、「右手」は方角としては南になり、その海域には櫃石島・松島・釜島・室木島・岩黒島・羽佐島・与島・小与島などの島が点在しています。

このどこかの島に“城”があったこととなります。

### 3 “シワクの城”はどこか

下津井のすぐ右手(南)は櫃石島ですので、この島が第一候補地になります。

1927(昭和2)年、呉秀三から調査を依頼された岡田唯吉は、早速櫃石小学校長宛



▲図1 備讃瀬戸写真(ランドサット衛星画像[NASA]より)

に問い合わせをします。

その結果は、「真城」「丸ノ上」「丸の下」「ボンノシロ」など城に関係する地名は多いものの、石造りに関しては採石場の跡や古墳はあるが、はっきりしないというものでした。

櫃石島をはじめ南の岩黒島・羽佐島・与島に関しては、瀬戸大橋架橋に先立って1976（昭和51）年から7年間島内の遺跡について詳細な調査が実施されていますが、城跡は確認されていません。櫃石島の城に関する地名については、付近に石垣などは存在せず丘陵頂部であることから見張り場的な用途の名残ではなかろうかと推定されています。

櫃石島の東の「松島」や「釜島」には10世紀の藤原純友の乱に関係した城の伝承がありますが、明確な遺跡は未確認で、戦国時代の城館跡についても近年の総合調査では明らかになっていません。

このように簡単には“シワクの城”に辿り着けませんが、再度記述を読み直すとあることに気づきました。それは「傍らに小さな村がある」という箇所です。

島の集落は、海岸沿いにあるのが一般的です。丘陵部に造られる城とは、立地が明らかに異なるのです。ケンペルの言う“城”とは低地にある建造物を指している可能性があります。

#### 4 ケンペルの“城”とは

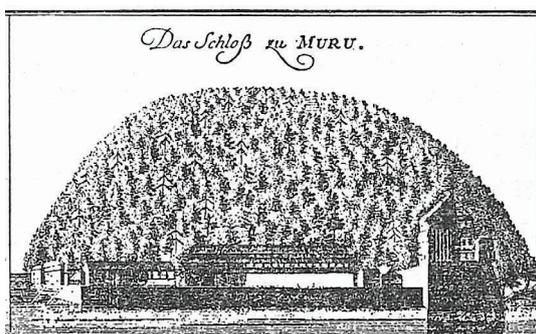
ケンペルは小倉から大阪までの間で見た城を次のように書き留めています（文献①による）。

- 幾つかの高い櫓のある美しく立派な城（今治城）
- 白壁と隅櫓のある立派な赤穂城
- 立派な天守閣のそびえる城（姫路城）
- 城壁の中央と両端に三層の四角形の櫓があって、威容を誇っている（明石城）

これらは現代のわれわれが認識する“城”と一致しますが、異なる建造物もケンペルは“城”と表現しています。室（現在の兵庫県たつの市御津町室津）の番所が、その例です。

図2のように「Das Schloß」（城）と表現してスケッチし、日記には「港の西側すなわち港の出入り口に面して建っている砦には、防御施設のある番所があった」と書き記しています。

この番所は江戸時代の『播州名所巡覧図絵』（図3）には、海際の石垣の上に大きな建物が描かれており、このような施設も「城」とみなしていたことがわかります。



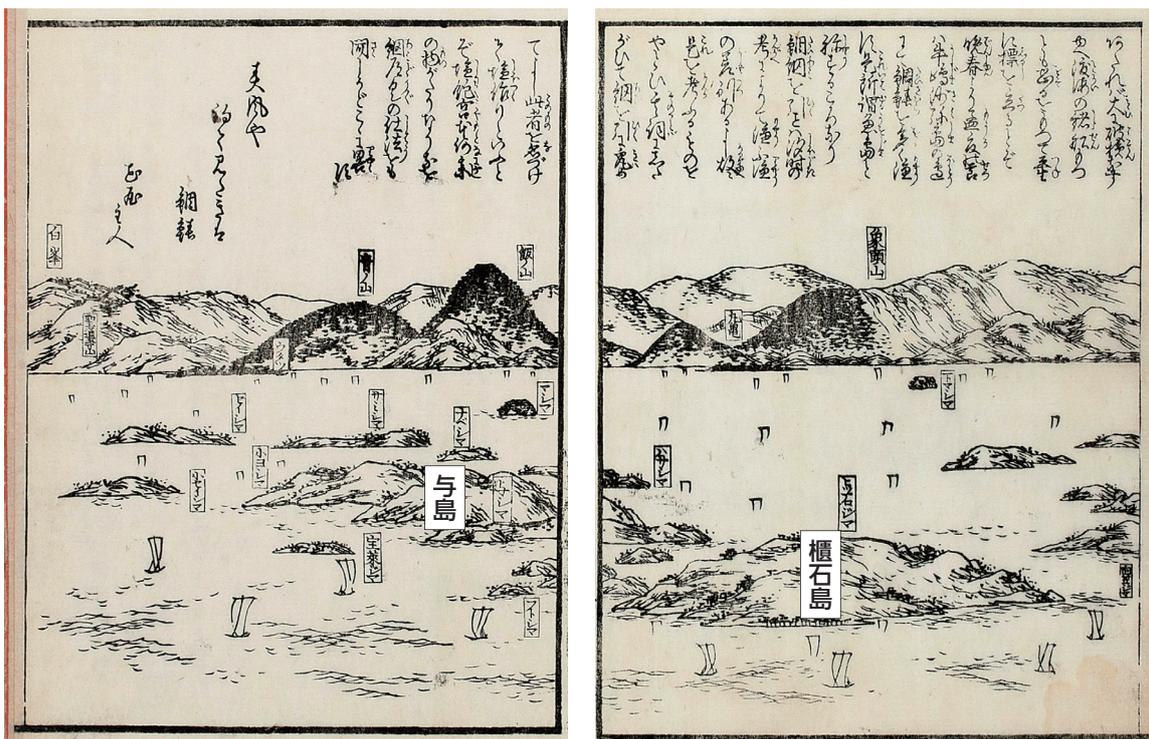
▲図2 室の城—江戸参府旅行日記の挿図の一部（文献①より転載）



▲図3 江戸時代の「播州名所巡覧図絵」の室津の番所（文献④より転載）

#### 5 与島の焚場<sup>たてば</sup>

下津井の南側の島々の中で「石造りの構造物とその横の村」から直ぐに思い起こされるのは、前号・前々号で取り上げた与島になります。



▲図4 「下津井ノ浦の後の山扇峠より南海眺望の図」『金毘羅参詣名所図会』1847年(当館蔵)

塩飽（シワク）という甚だ狭い小さな村があり、人家はすべて瓦葺である。そこには船の修繕所（焚場）があり、厚さ1.8mの花崗岩で石垣を築いていると、シーボルトは記録しています。

この焚場の位置は、与島北辺の湾であったことは確実ですので、下津井付近の船上から南方面にこれが望めるか否かがポイントになります。

図4は下津井港からの塩飽諸島の鳥瞰図です。標高70m前後の地点（扇峠）から見た風景ですので、多くの島々が描かれていますが、船上だと視角はぐっと低くなります。

ケンペルが進んでいた航路は図の下辺になりますので、例えば船が図の右半分的位置にいる段階では、南の島々は櫃石島の丘陵に隠れて見えません。櫃石島を通過すると一気に眺望が開け、与島北辺がよく見えることになります。

緑色の木々に覆われた東西の丘陵の谷間に、屋根が銀色に鈍く光る家々とその手前に延びる石垣。このような光景は目立ち、ケンペルはペンを走らせ記録に留めたのでしょう。

（館長 大山 眞充）

<引用・参考文献>

- ① 斎藤信記『江戸参府旅行日記』（東洋文庫303）平凡社 1977
- ② 香川県教育委員会『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財予備調査報告』（I）・（II）1976・1977
- ③ 岡山県教育委員会『岡山県中世城館跡総合調査報告書 第一冊 備前編』2020
- ④ 『特別展 室津の町並み』御津町教育委員会 1999
- ⑤ 西田正憲『瀬戸内海の発見』中公新書 1999

# 墨絵体験講座

体験講座を終えて  
日本水墨画美術協会 会員 市原 増夫

## 夏休み体験講座「墨絵を楽しもう！」

2022年7月30日(土曜日)に鎌田共済会郷土博物館で『墨絵を楽しもう』が、コロナ禍のため欠席者が数名いたが、小学生、中学生を対象に午前6名と午後4名の参加で開催されました。



### ■墨絵とは

鎌倉時代に中国から日本に伝来された水墨画、墨彩画などが起源であり、和紙に墨と水で描かれた絵画のことである。

### ■墨絵を始めるための練習

初めて墨絵を描く人がほとんどで、硯で墨を摺って墨色を作ったことがないため、最初に硯と墨で墨色を作ることから始めました。

まず硯の上に水をたらし丸くゆっくり墨を摺って墨色を出すことを体験。

次に筆を使って手の動きの練習と墨の濃淡の作り方を練習。水を多くすれば墨色は、薄く、水が少ないと濃くなることを理解したうえで、直線、曲線、点、丸や、さらに筆の先だけで細い線や筆の側面(はら)を使って太い線、にじみの線、かすれた線などいろいろ描いてみた。

これは、墨絵を描くための基本を知るとともに手の動きをスムーズにするための練習である。



### ■墨流し

そのあと墨を使った墨流しで丸い紙のコースターを作成。

トレイに水をため、その表面に墨汁の墨を落とし、箸で少しかき混ぜ渦巻き模様を作る。できた模様の上から、コースターを落としその模様を写し取る。それぞれできたコースターは、同じものはできない。

初めての体験で楽しく興味を持って取り組んでいました。



### ■作品作り

申し込み時に、描きたい絵の題材を検討しておく様をお願いしていたためスムーズに作品作りに入ることができた。

また、題材も猫、ライオン、花、鳥、家紋、昆虫、魚など幅広く、絵の表現も初めての墨絵にしては、筆遣いを工夫しながらユニークで素晴らしい作品がいろいろできました。

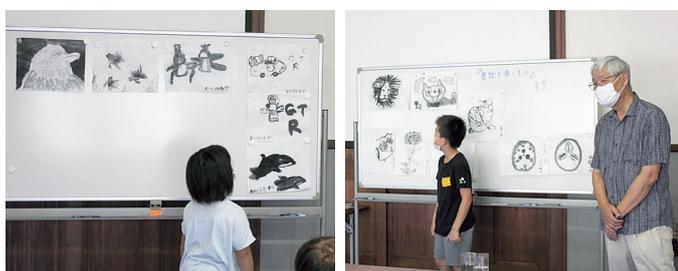


### ■作品の思いを各自発表

最後に作品のどのようなことを工夫して描いたかそれぞれ思いを発表しました。

初めて墨を使って絵を描くことを体験したわりには、想像を超える素晴らしい作品が多くできたと思います。

今後、墨絵に興味を持ってもらうとともに水墨画等多くの展覧会を見て感性を高めて頂ければと思います。



## 「建築記念 鎌田共済会図書館」絵葉書について

(表紙解説)

表紙でご紹介している絵葉書は、鎌田共済会図書館の開館記念として作られたものです。高松市の岡部写真店に依頼し、開館を目前にした1922(大正11)年9月9日に撮影され、若緑色の袋(表紙右上)に収納された4枚一組の絵葉書を1500組発注したという記録があります。

日本で郵便制度が始まったのは、1871(明治4)年で、1873(明治6)年には官製葉書の発行が始まりました。1900(明治33)年に郵政法が改正され、私製絵葉書が認可されました。そして1904(明治37)年に始まった日露戦争の記念絵葉書を通信省が発行したことがきっかけで大流行し、絵葉書が広く国民に浸透していくこととなりました。

現代のように、誰もがいつでも写真を撮ることができる時代ではなかったため、ビジュアルな絵葉書は、新たな情報伝達手段として普及していきました。戦役記念のほか、震災や災害、あるいは展覧会といった非日常を伝えるもの、観光地などの風景、広告、美人画など、その内容はさまざまであり、今となっては当時の様子を知る手段といえるでしょう。鎌田共済会においても、図書館の建設を記念するとともに、どのような図書館であるのかといった宣伝も兼ねて絵葉書を製作・配布したのと思われま

す。絵葉書と現在を比較してみると、周囲の景観は随分変化してしまいましたが、建物の外観はほぼそのままです。建物内部の閲覧室であった部屋は第2展示室(久米通賢資料室)、児童閲覧室は第3展示室として現在使用しており、今でも残る照明の痕跡が、わずかに当時の面影を残しています。

(宮武 尚美)



## INFORMATION

### ■鎌田共済会郷土博物館 第12回公開講座

#### 「今と違った100年前の図書館」

2022年10月29日(土)

・午前の部10:00~11:30(開場9時半)

・午後の部13:30~15:00(開場13時)

会場：鎌田共済会郷土博物館2階講堂

講師：大山真充(当館館長)

#### 【申込10月4日(火)から、各回先着20名、参加無料】

電話またはホームページからお申込み下さい。

電話：0877-46-2275

HP:<https://www.kamahaku.jp>

※詳しくはホームページを

ご覧ください。



※本講座は、新型コロナウイルスの感染拡大状況により中止になる場合があります。

### ■展示図録「ここに100年 そして未来へ」

#### —鎌田共済会 図書館・郷土博物館のあゆみ—



2022年10月1日(土)より展示図録の販売を開始します。当博物館又は配送にて販売しております。

全122頁、A4サイズ

価格：1800円(税込み)  
(送料別)

## 鎌田共済会郷土博物館



### Access

高松から…快速マリンライナーで約15分

岡山から…快速マリンライナーで約40分

JR予讃線坂出駅から徒歩5分

※駐車場あり

開館時間：午前9時30分～午後4時30分(入館は4時まで)

休館日：月曜日/祝日

夏季特別(8月13日～15日)

年末年始(12月29日～1月4日)

入館料：無料